《新刊紹介》

阿部真人・阿部雅子著『日本の動物文学』

「動物文学」といったものは日頃意識されないかもしれないが、考えてみれば、私たちはこれまでに「動物が重要な役割、意味を担って登場する文学の総称」と氏の定義される「動物文学」に属する作品のいくつかとふれあってきたはずである。私自身、まず心に思い浮かぶのは、「シートン動物記」、それに本書でも第二部で扱われている、椋鳩十の作品である。特に国語教育を専攻するものとしては、椋鳩十の名前は、「小学校の頃の記憶ではすまされない。ある教材を考える上で、作者の、本書中のことばでいえば「バックボーン」を理解しておくことは、教える、教えないの問題ではなく大切なことであろう。そうした点からも興味を持って読むことができた。なお、氏はすでに『椋鳩十の研究』を著しておられ、「大造じいさんとがん」についてはこちらの書にくわしい。

本書の構成は大きく第一部と第二部に分かれている。第一部は「戸川幸夫の動物文学」、第二部は「椋鳩十の動物文学」である。作家の出発点からその原型を明らかにした上で、通時的な変化、また、同時期においての異なる様相が具体的な作品叙述に即して丁寧に述べられている。

人間と動物、ひいては人間と自然との関係については折りにふれて考えさせられる。近年特に取りざたされる世界的な動向であるといえよう。本書からは「動物文学」を研究する氏自身の「生きとし生けるものへの愛」を感じさせずにはいられない。なお本書は夫人との二人三脚のもと生まれている。暖かな著作である。

（B6判　三四八ページ　一九九四年十二月　渓水社　三五〇〇円）

（林　直紀）